

令和7（2025）年7月4日

Press Release

報道関係者各位

## 快挙！海の中に屹立する富士山！？ 新科・新属・新種のイソギンチャクを発表

生命工学部海洋生物科学科泉講師らのグループは、駿河湾・相模湾等から採集された異形のイソギンチャクを、新科・新属・新種として発表しました。その外見から「ウミノフジサン」と名付けられた本種は、イソギンチャクの中でも極めて珍しい形態を多数有しています。

- (1)駿河湾、相模湾、そして太平洋および日本海から、見慣れない形のイソギンチャクが採集された。
- (2)DNA の解析からセトモノイソギンチャク上科のイソギンチャクであることは分かったが、その触手の配置や体内の形状が、どの科・属にも一致しない種であった。
- (3)その結果、新科・新属・新種のイソギンチャク「ウミノフジサン」として発表された。

## &lt;概略&gt;

海洋生物科学科の泉貴人講師はこのたび、千葉県立中央博物館分館海の博物館（千葉県）の柳研介主任上席研究員および東京大学理学系研究科附属臨海実験所（神奈川県）の幸塚久典技術職員とともに、新科・新属・新種のイソギンチャク「ウミノフジサン」 *Discoactis tritentaculata* (図1) を世界に発表しました。

このイソギンチャクは、駿河湾、相模湾ほか日本の各地から採集され、そこまで珍しい種類ではないのですが、その形状はあまりに独特。触手の配置や、体内に走る隔膜の枚数などがどのイソギンチャクのグループとも一致していません。

DNA を用いた解析により、「セトモノイソギンチャク上科」というグループに入ることまでは判明しました。しかし、このグループに属する科・属には本種に似た形状のイソギンチャクが存在しないことから、本種は「新科・新属・新種」となるのが妥当だと判断され、今回の発表に至りました。泉講師がイソギンチャクで「新科」を立てたのは2例目、「新属」は5例目。いずれも日本人では比肩する者がいない金字塔です。

今回の新種は、そのユニークな形状から採集場所のうち相模湾・駿河湾の近隣にそびえる富士山を連想させます。よって、「ウミノフジサン（海の富士山）」という素敵な和名がつけました。

泉講師は「海、特に深海というのは未知の領域。新しい“科”のレベルの大発見が、この日本の海から出てくるんです。ひょっとしたらこの後、さらに大きな段階（上科？亜目？）の発見をするかもしれませんので、乞うご期待！」と、さらなる金字塔を狙う食欲さを前面に見せています。

本動画にて、泉講師自ら今回の成果について解説しております。是非ご覧ください。

<https://youtu.be/pTYgVGmj8rM>



図1.ウミノフジサンと富士山（論文HPより）

### ＜詳細＞

福山大学海洋生物科学科の泉貴人講師はこのたび、千葉県立中央博物館分館海の博物館（千葉県）の柳研介主任上席研究員および東京大学理学系研究科附属臨海実験所（神奈川県）の幸塚久典技術職員とともに、新科・新属・新種（※）のイソギンチャク「ウミノフジサン」 *Discoactis tritentaculata*（図1）を世界に発表しました。

このイソギンチャクは、駿河湾、相模湾ほか日本の各地から採集されました。今回の研究で10個体以上採集されており、そこまで珍しい種類というわけではないのですが、その形状はあまりに独特でした。まず、イソギンチャクでは基本的に12枚あるはずの完全隔膜が10枚しか存在しないというのが非常に特徴的で、さらに末広りの形状であり（図2A,B）、下側に行けば行くほど隔膜（※※）の枚数が増えていくといき、最後は200枚弱になるという、不思議な特徴を持っています（図2D-E）。

さらには、触手の配置において「3つ組の触手が最大6組あり、その間に触手の生えない場所がある」（図2C）という、他のどの種にも一致しない特徴があることで特徴づけられます。

DNAを用いた解析により、「尋常イソギンチャク亜目・セトモノイソギンチャク上科」というグループに入ることまでは判明しました。しかし、このグループに属する科には本種に似た形状のイソギンチャクが存在しません。一番近縁なヨウサイイソギンチャク科 *Capneidae* は、末広りの形状こそ共通するものの、触手の配置や筋肉組織の由来などが完全に異なっており、この科に包含するのは困難であると判断されました。

よって、本種は「新科・新属・新種」となるのが妥当だと判断され、今回の発表に至りました。泉講師がイソギンチャクで「新科」を立てたのは2例目、「新属」は5例目。いずれも日本人では比肩する者がいない金字塔です。

今回の新種は、そのユニークな形状から、および採集場所のうち相模湾・駿河湾の近隣にそびえる富士山を連想させます。実際に晴れた日には、ウミノフジサンの採集中に船の上から綺麗な富士の峰を見ることができました。よって、我々は「ウミノフジサン（海の富士山）」という素敵な和名をこのイソギンチャクにつけました。

泉講師は「海、特に深海というのは未知の領域。新しい“科”のレベルの大発見が、この日本の海から出てくるんです。ひょっとしたらこの後、さらに大きな段階（上科？亜目？）の発見をするかもしれませんので、乞うご期待！」と、さらなる金字塔を狙う食欲さを前面に見せています。

本研究は、MDPI社の発刊する *Diversity* 誌に掲載されました。

詳しくは、こちらの解説動画をご覧ください。泉講師自ら、分かりやすく解説しております。

URL：（制作中、週明けまでに補完します）

※科・属：生物の種を集めた小さなグループを「属」、その属の集合が有名な「科」となる。イソギンチャクでは、科を集めた「上科」、更に上科をいくつか含む「亜目」というグループもあり、本種の属する尋常イソギンチャク亜目・セトモノイソギンチャク上科は、それぞれその一つ。

※※隔膜：イソギンチャクの体を輪切りにすると、周囲から中央に向けて放射状に伸びる大小の筋状構造を見ることができる。これを「隔膜」と呼ぶ。イソギンチャクの分類においては、この隔膜の形状や枚数が重要なキーとして用いられる。

ウミノフジサンの完全隔膜（体壁から食道まで伸びる大きな隔膜）が10枚しかないというのは、非常に珍しい特徴であり、これで他の殆どのグループと区別できる。

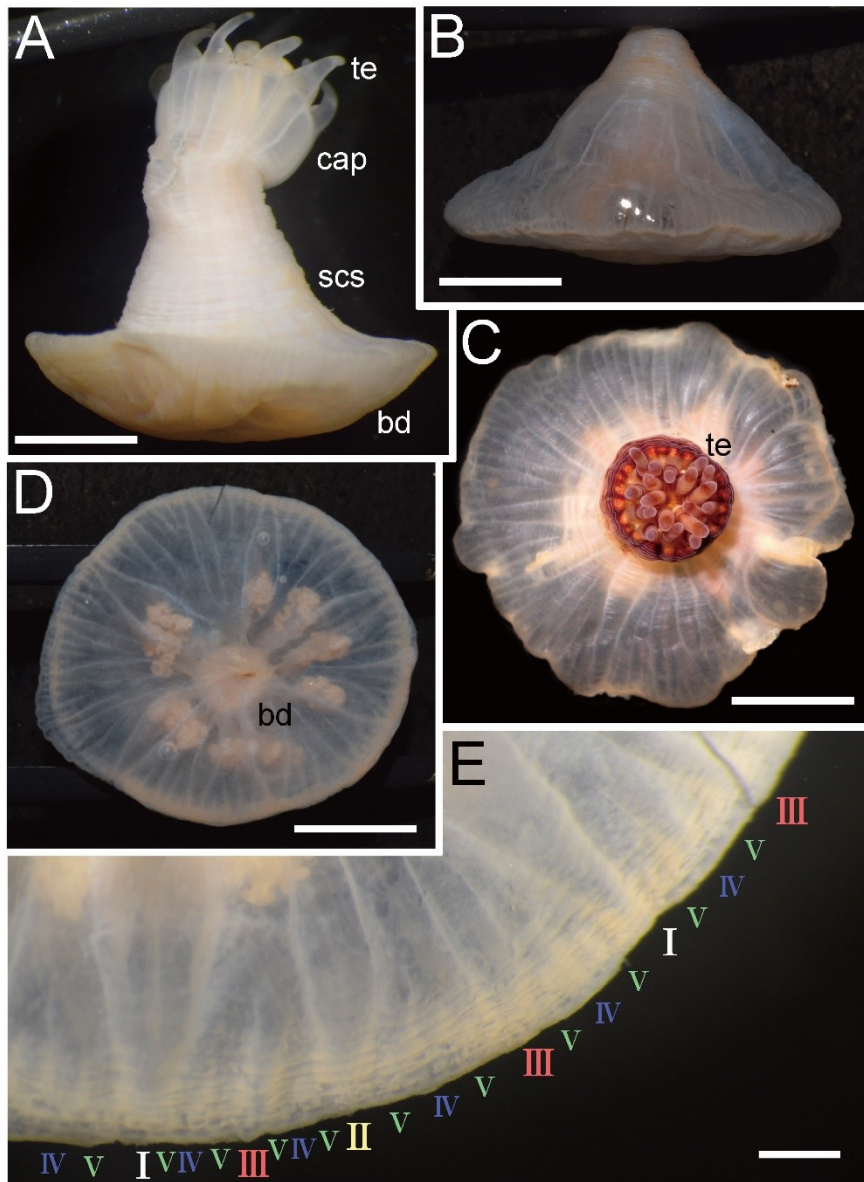


図 2 ウミノフジサン *Discoactis tritentaculata* 外観。直径約 1.5～2cm。  
C のみ生体、他は標本。論文の図 2 より引用。

★論文はこちら

Izumi T., Yanagi K., and Kohtsuka H. (2025) Mt. Fuji in the Ocean—Description of a Strange New Species of Sea Anemone, *Discoactis tritentaculata* fam., gen., and sp. nov. (Cnidaria; Anthozoa; Actiniaria; Actinostoloidea) from Japan, with the Foundation of a New Family and Genus. Diversity, 17(6), 430. <https://doi.org/10.3390/d17060430>

☆本件に関するお問い合わせ先☆

【担当者】 泉貴人（生命工学部 海洋生物科学科）

【電話番号】 084-936-2112（内線 4529）

【E-mail】 [iz.kurage@fukuyama-u.ac.jp](mailto:iz.kurage@fukuyama-u.ac.jp)